

I-LC誘致に関する日本政府見解とこれから

岩手県立大学長 鈴木 厚人

(東北I-LC準備室長)



1. 3月7日の政府見解を読み解く

3月7日に文科省研究振興局長(以下、局長)より「国際リニアコライダー計画に関する見解」が公表されました。

- ① 日本学術会議の所見を踏まえ、現時点で日本誘致の表明には至らないが、国内の科学コミュニティの理解・支持を得られるかどうかも含め、正式な学術プロセス(学術会議が策定するマスタープラン等)で議論することが必要である。
- ② 国内外においても、欧州素粒子物理戦略等における議論の進捗を注視する。
- ③ I-LC計画については、日本学術会議の所見で課題等が指摘されている一方、素粒子物理学におけるヒッグス粒子の精密測定的重要性に関する一定の学術的意義を有すると共に、I-LC計画がもたらす

技術的研究の推進や立地地域への効果の可能性を鑑み、文科省はI-LC計画に関心を持って国際的な意見交換を継続する。

この見解は、国際研究者コミュニティが5年間待ち望んでいた日本政府のI-LC誘致の意志表明を、学術会議答申の遅れ等の日本の事情に配慮を重ねて今年3月を最終期限としたことを鑑みると、物足りなく、これまでと何が違うのか、前進するのか後退するのか判らない曖昧模糊としたものでした。しかし、気を取り直して何回も読み返してみようちに、次第にあぶり出しのごとく、真意が少しずつ見えてきました。

まずI-LCのような国際大型計画は一時のYes・Noの決断ではなく、

Step

1..計画の重要性の評価

- S2..技術設計・経費評価の妥当性
- S3..技術・経費・運営の国際分担の評価
- S4..計画実施の評価
- S5..運転開始の評価

のように、計画の進展段階ごとに評価・承認して進めます。I-LCは現在、S1、S2が終了してS3に差し掛かった所です。この段階では、I-LCの誘致を目指す国が誘致の関心表明を行い、国際分担の政府間協議を主導します。

この意味で、政府見解①の「現時点で日本誘致の表明には至らないが、…議論することが必要である。」は、政府が前向きにI-LCを捉えS3に進むことを示しています。さらに、③の「文科省はI-LC計画に関心を持って…」というメッセージは、国際的に初めて日本政府がI-LC関心表明を行ったと評価されます。これまで、政府はI-LCに関して公

式に言及したことはありませんでした。私たちはILCに関する予算要求をする時も、ILCは使えず、先端加速器技術開発費等で申請しなければなりませんでした。大きな前進です。

さらに、「政府間協議」ではなく「意見交換を継続する」の表現は、国際政府間で使用される「協議と意見交換」の外交上の言葉の意味の相違によるもので、現段階では意見交換が適切とのことでした。また、政府見解の公表の直後の記者会見で局長は、「継続については日米間のことであり、日仏や日独ではこれまでの情報交換から正式な意見交換に格上げする」と言明しました。これも前進です。

2. 3月7日の国際将来加速器委員会（ICFA）とその声明

政府見解の公表直後に開催された世界の加速器研究所長による委員会（国際将来加速器委員会・ICFA）において、局長はさらに踏み込んだ見解を示しました。

一つは、文科省が中心になり経産省、国交省、復興庁等々の省庁横断（財務省を除く）でILC誘致の検討をすでに開始したこと

です。このような他省庁連携で大型研究計画を議論することはこれまでになかったことです。

もう一つは、文科省の主導のもと高エネルギー加速器研究機構（KEK）に、さらなる技術・経費・運営分担やILC実施計画を煮詰める国際ワーキンググループを設置し、9月をめどに報告書を取りまとめることを明言しました。この組織は将来、ILC建設を指揮する国際ILC準備研究所の先駆けとなるもので、政府のILC誘致決断に向けての最終検討を意味するものです。

今回の政府見解を受けて、ICFA議長であるJ・テイラー（豪・素粒子物理学中央研究所長）は「私たちは日本の国会議員や文部科学省の上級職員との対話で、日本の政治・行政の環境はILCに向かって急速に発展していることが示され、非常に勇気付けられました。私たちは、日本からILCのホストに対する積極的な姿勢が、そう遠くない将来に表明されることを、今なお大きく期待しています。」と述べました。

また、ILC計画実行委員会のL・エヴァンス議長は、「今日、私たちは望んでいたグリーンライト（青信号）を得ることはできませんでしたが、それでも強力な政治声明と、

局長によるさらなる討議への関心の表明により、大きな前進がありました」とコメントしています。

3. 改めて3月7日とは

ここで、3月7日という日を振り返ってみると、1969年に人類史上初の月面に降り立ったアポロ宇宙船の阿姆斯特朗船長の名言「これは一人の人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては偉大な飛躍である」が思い出されます。「政府見解の一つ一つは小さな取り組みですが、初めて公式にILCへの関心と、誘致判断に向けての政府間交渉に踏み出す決意表明を出したことは、ILCにとっては偉大な飛躍である」と言えます。

4. 始動

4月15日の時点で、KEK内に国際ワーキンググループが結成されました。また、日仏間の意見交換も近々予定されています。日独間の意見交換も近々予定されています。これが大詰めへの始動です。これが「偉大な飛躍」となるよう、決意を新たにしていきたいと思います。皆様におかれましても、より一層のご支援とご協力をお願いいたします。